

# 「報正寺・過去帳差別記載への取り組み」

城山 大賢

(過去帳に差別記載があることを知る)

私の寺の過去帳に差別記載があることをしったのは十二〜十三才の頃です。父親が「四つ」といわれたり、新平民と言われた人がいるんだということを教えてくれました。しかしだから用心せえというわけでも、又私にそのことがおかしいと教育する意味でもなく、事実をしらせたということでした。その時に過去帳の「チャセン」ということが被差別部落の人をさすことだとしりました。それは、朱で書いてあったからすぐ分かったわけですが、「カワタ」と黒字で書いてあるのが被差別身分のことであるとはしりませんでした。カワタというのが被差別者の称号であるということを知ったのは私が村の社会教育に関係しはじめてからのことです。

その当時は被差別部落の門徒さんは私の村内におられませんでした、一九五〇年代に村外に出られたようでありました。そこで、私の寺の過去帳をたどっていけば、この人が被差別部落の門徒さんの曾おばあさん等とわかるようになっていくかと思うではありません、切れています。おそらく筒賀村に被差別部落の家庭が江戸期に五・六軒ぐらいあったと思われませんが、どこの家のことかはわからなくなっています。

私が二八才の頃、筒賀村の社会教育指導員という役目をもらって同和教育というものを学びました。三〇才頃にその役はやめました、これが部落差別との学びの最初でした。

(差別記載に墨を塗る)

私自身、差別過去帳をどうしたらよいかと前から思っておりまして。三〇才か三一才の頃墨を塗った記憶があります。これは一つの歴史の資料だし、別に消さんでもいいかなと思ったりもしたんですが、私がもし死んだり家族が入れ替わったりした時、もしそれが残っていたらそれがもとで身元調査・結婚差別・就職差別ということになったりしたら大変なことになるんで消しておこうと思いました。直接今の門徒さんとながりはわからないけれども、筒賀村に被差別部落があったということはわかるわけですので、いずれにせよそういうことになってはいけないうらと消すことにしたんです。

ところが消したにしても、墨が薄いんですから、透かせば見えるんです。「チャセン」というのは朱で書いてありましたから。「カワタ」というのは墨ですから黒に塗って見えなくなっただけです。

(差別過去帳を抱えて、おばあさんとの出会い)

そしてそうこうしているうちに、私は本願寺の同和教育センターで学ぶようになりました。そこで勉強してみよう、又そこで本願寺とつながって本願寺の改革のきっかけとなりはしないかという思いもあって、入って学ん

でいるうちに、自坊の門徒さんにちゃんと対応しなきゃいけないということになってきました。で、私の寺の被差別部落の門徒さんというのは、はっきりしているのは一軒しかないんです。もう一軒は元報正寺の門徒さんですが、今は隣の町村に所属して他の寺の門徒さんになっておられます。でもやっぱりそうはいうものの、うちの差別過去帳に記載されておつて差別してきた寺の責任があるから、これは直接おうかがいして、「こういう差別記載がありました。今は消しております」ということをお詫びして、お仏壇に参っておつとめをしてこようと。

そしてこうなったのは親鸞さんがなくなった後、教団が間違ってきた証しで、実はそれがこういう形でうちの寺の住職も差別してきたということを思いますと、本来の念仏と親鸞さんが説いたことは何かということをお解ってもらわなきゃいけないという思いもありました。結局その過去帳をもってまいりましておばあさんへ見せました。おばあさんは眼がうすくなっておられましたが、たしか八〇才だと思いますが、私もかなり緊張致しました。その門徒さんというのは確かそのおばあさんの連れあいさんが亡くなったとき、お葬式に参っただけで、法事は近くのお寺さんが参っておられまして、私がお伺い

したことはなかったんです。お墓には時々参っておられました、私の村にありましたから。というようなことで因縁がかなり薄かったので緊張して、「おばあさん、昔うちが差別しておったことと思いますし、過去帳にも差別記載があったんです。私はこれからこうしたことがあっちゃあいけんから、塗りつぶしました」と言って、仏壇にお参りしてからおばあさんに見せました。おばあさんは「たまげませんよ」というちゃったですね。「たまぎゃあしませんよ、私ら差別されとりましたけえ」というて。「あんたの曾おじいさんは、うちに参ってくれ参ってくれいっても参ってくれてんなかった。私は腹が立ってよそのお寺さんに参ってもらうことにしたらね、あなたのおばあさんが、よその門徒さんになってもらっちゃあこまるいうことで、よりをもどした。というようなことがありましたよ」と言われましてね。おそらく先々代はその家に参っても「おとき」を食べなかったんじゃないかと想像するんです。そのおばあさんが言われるのに「昔、村の誰かが私に『あんたん所に報正寺の住職が参ってじゃが、おときなんか食べてじゃああるまあが』と問うたこともありましたよ」とまた「あなたのお父さんは食べてくれよっちゃったですよ」と。「じゃあおばあさん、その前の住職は参ってもおときを食べん

かったかもしれんね」と言うたら、「そうかもしれませんねえ」と言っておられました。

（差別記載、もう一人の元門徒さんとの出会い）

そしてもう一人隣の町村の被差別部落の地区へ移られた門徒さんがあって、そこにも行きました。じつはあらかじめ電話をかけた上で、「実は過去帳を調べてみると、あなたの所は報正寺の門徒さんだったんですね、実はチョットお話しをさせてほしい、あわせてください」というと、「ええですよ」ということだったので、過去帳をカバンに入れて行きまして、「実はうちが差別をしておったことを、まあこうして同和問題の勉強をさせてもらいなながら親鸞さまに学んで、もう一返考えなおさなさいけんと思うて、今日きました」というてですね、仏壇にお参りしたんですが、過去帳はとうとう出さなかったと思います。出す機会がなかったのか、出しにくかったのか。おかあさんにいうたことはいうたと思うんです。うちの過去帳に差別の記載があって、実はスミは塗っておるんだがということ。そういうことを言うて話をしてきた時に、そのおかあさんがうちの子供が結婚して嫁さんが来てくれたんだけど、嫁さんとの里とはまった

く絶縁状態だということ、今もそういうようなことがあるんかとたまたげたようなことで、いろんな話を聞かせてもらうておりました。

### (私の差別体質)

そういうことがありまして、うちの寺でもうちの寺が差別しておったというような説教をしましたし、よそのお寺でも話しをしたんですね。うちの寺には差別過去帳がありましたと。

ある町村の寺でお説教をしておったわけですが、そこであま一九八五年、正福寺法座事件というのがありまして、あそこで「うちの寺の過去帳に差別記載がありました、チャセンとかカワタというて書いてありまして、うちの寺が差別しておったんですねよ」といって、うちの會おじいさんは被差別部落の門徒さんに法事に参ってくれと言われてもなかなか参らなかつたので、おばあさんがおこられた等ということを話しとる中に、一人の被差別部落の人がおられたんです。でまあ、その地区は被差別部落の人がおられるから、おそらくお聴聞に参っておられるだろうなあということは思っていました。だからこそ、あえて話しをしようという思いもあったわけですが、

その人が立ちあがっておこられましたですね。「あなた得意になって話しをしとる。そしてあなた差別語を出したじゃあないか。それは問題だ」と言われましてたまたげたんですが、いろんなことがありまして、あとから話しをしたり、あくる日も法座をつとめまして、その町の教育委員会から、法座の席でいろいろあったらしいが、あなたはどう思うんかというような形で聞かれました。はじめは、私は別に間違ったことを言ったはずはないと思うんだが、そのおじいさんの取り方がおかしいんじゃないかということを言ったりもしたり、思ったりもしたんですね。まあそういったことがあって、江嶋さんに相談したり、小森さんに手紙を書いたりと、私自身が差別意識を持って言ったとは思わず、どっかでそのおじいさんの気に障るところがあったのかと思ったりしております。またある解放同盟の支部に行き、「そりゃあ同和会はそういう体質をもっとるけえ、解放同盟の方ならむしろ勇気づけられる話じゃがお」ということを聞いたりしております。あれこれあったんですが、結局はよく考えてみて、私自身の尊大性・おごりたかぶりというものでしょうか。同和会の人であろうとなかろうと長い歴史の中で、チャセンとかカワタというて差別されてきた思いというものがずーとあって、寺の坊主がいかにも

同和教育じゃというてえらそうげに言うとするけど、何ほどのもんならというものがおありになったのかなという思いもいたしまして、私自身の体質というんでしようか、それを深く反省させられたことです。でも相変わらず、その体質は変わっていないように思っています。

(本願寺の調査の中の過去帳の書き換え)

そういう事があったところに糾弾会があったわけです。でも、それまでに本願寺の方から過去帳差別記載がありませんかというて調査があったとき、すぐ私はありませんよと言っていました。そしたら本願寺の方からさっそくこられましてですねえ、写真をとり。そしてこれは残念なことだったですが「解放団体には言いなさんなよ」と言われて、「これは絶対に秘密にしますから」、と言ってかえられました。そがいに解放団体は怖いものかとその時私は思ったんですが。そういうようなことがあった後糾弾学習会があって私は二回目から参加させてもらったんです。それからあの頃、安芸教区で七カ寺でしたかね、まあとにかくこりゃあ何とかせにゃあいけんだろうというて、私のところはこれは透かせば見えるんですから、一部だけ書き替えようと、一部切り

取ってやったんじゃあこりゃあ何かおかしいでということになりますので、半頁を同じような和紙を買って、全部書きかえて、原本は本願寺へ厳重保管という形を取ってもらいました。でまあ四〇カ所記載があったわけですが、それを書きかえまして処理したという形なんです。

(過去帳差別記載があったことを公表するために)

そして、それで事が済んだと思ったら、江田島の教法寺さんが公表されたという記事があったものですから、公表というのはどういふことかと思いました。七カ寺差別記載があったのは皆それぞれ、解放同盟の方は皆知っておってもらうわけで、これで公表になったわけじゃないかと思っておりましたら、公表というのは、まず家族が了解し、門徒が了解し、組が了解し、教区が了解してそういう形で公表というんだということを教区で聞きまして、そうかよし、私もそこまでやらにゃあいけんと思いました。家族はまあ分かってますし、門徒へは説教しとるけど、まいる人は少ないし、多くのみなさんは知らんわけですから。それじゃあ私が新聞を作って公表しようということをおもいつきまして、そのためには被差別部

落の門徒さんに了解してもらわにゃあいけん。そのおばあさんは、高齢でありますがその娘さんがおつてんです。その娘さんがはたして自分が部落出身かどうか御存じかどうかわからんわけです。もう一人隣の町村へ行かれた門徒さん（今は私の方の門徒さんじゃあないんですが）の次男さんが解放運動をやっておられるわけです。その人と相談をしまして、どうしようかと言いますと、そりゃああなたがキチンとせにゃあいけんけえ、一緒にやろうやということになりまして、もう一軒の方は娘さんが部落出身かどうか知っておられるかどうかわからないうちに、突然行つて言うのもおかしいことじゃけえ、おばあさんに聞いてみようということ、老人ホームに入っておられるおばあさんの所に行つて、「あなたの娘さんは、かつて自分の先祖が差別された出身じゃと知つとつてじゃろうか」と聞けば、「知つとりますよ」と言うて、「酒屋へ行つて酒をこつても一般の人はマスで汲んでくれるのに、私にはドンブリで計つてくれたいうて腹を立てていたことがありますけえよう知つとります」と。そういうことで娘さんに連絡することになりました。

「実はおかあさんの所へ行つて、あなたが、被差別部落の出身じゃということを知つておられるということを知つたもんで、うちの寺に差別過去帳があつたことをお

かあさんからも聞いておつてじゃと思うが、まあ一遍あなたと話しをしたので、一ついろんな話を聞かせてくれませんか」と手紙を出した。それに対して手紙が来ました。そこには私は差別されたことがないと書かれてますね。わたしの姪の夫も知らんことです。何も申しあげることはありませんという手紙が来たんです。そいでまあそれはそれとして何か対応せにゃあいけんだらうということ、もう一人の青年と相談をして私が一つ案を書きました。「どがい思うか」と彼にいうたら、「こりゃあ部落の火葬場が別だったとか人に知らせたら、そういうことばかりが意識に残るもんよ、差別意識が増幅されることになるかもしれん」と言われましてね。「こりゃあ退けたほうがえかろう、もう一度書き換えてみんさいや」と言われましてね。ほいじゃあ書き換えようということ、書き換えました。その案を御婦人のところへ「実は私の寺の門信徒・親類縁者に出してみようと思つてます。御意見下さい」と言つてきたない字で私の手紙を書いたんです。私は私の思いでかなり一生懸命書いたつもりでした。まあその中に書かして頂いたことは、山手会館へ行つて話を聞かせてもらった時に、ここでは部落民宣言をするんだと、親と解放団体と先生と子供が差別がいかなるものか、差別にまけない差別に立ち向か

う、人間としての誇りをもって自覚をもってそういう人間になつていくんだということを本当に主体化したときに、みんなの前で部落民宣言をするということをやつて、るんですということを聞いて本当に感動を致しまして、まあ私はそのことや在日朝鮮人の人が本名宣言されることも、手紙の中に書きました。私は人間の価値・見方というものを仏教から学ぶんですが、その人間の値打ちとか輝きというのは、家柄でもなければあ血管でもないし学歴でもなければあ職業でもないし、それこそ人間の本当のいのちの根源的要求としての願求、つまりは自己と世界の自己実現、ひいては自己と世界の解放という人間としての自覚そのものであり、それをみずからのものでしているかどうかという所にあるんじゃないでしょうか。等と

でも、それから返事はございませんでした。やはり私  
が手紙を書く姿勢に、かつての法座の時と同じように、  
私自身の尊大性・おごりがあったのではないかと思つて  
います。でもお墓まいりには来られますし、話をした  
いという思いをもつていて下さいますので、これから  
ジックリ話しを聞かせて頂きたいと思つています。

(一九九三年二月二〇日 宗教部会で発表したものを、  
その後のディスカッションで気づいたことを踏まえて手

直しました)

